



秋

2007

3 【学長コラム】

創立120周年に向けて

学長 柳澤 保徳

4 教職大学院で実践的指導力をつけよう

教育実践開発講座・教授 安藤 輝次

6 「地域と伝統文化」教育プログラム

プログラム実施担当者・准教授 山岸 公基

幼保統合の「保育実践知」教育プログラム

プログラム実施担当者・准教授 横山 真貴子

ユネスコ協同学校に加盟

副学長(国際交流・地域連携担当) 淡野 明彦

8 【ラボレター】

宇宙の形と3次元の幾何学

数学教育講座・准教授 市原 一裕

「ことば」の変遷を見つめて

英語教育講座・准教授 米倉 陽子

9 【ひと・あれ・これ】

地域に学ぶ伝統文化

京都市立洛央小学校・教諭 畑 和代

地域を対象としたスポーツ活動

プリントショップ A-Win (アーウィン) 丹羽 敦巳

10 第1回大学懇談会に地域の方が参加

大学懇談会実行委員会委員長(学生代表) 旧田 克也

11 日本語・日本文化研修留学生及び特別聴講学生入学式 平成19年度秋季留学生懇談会

学生支援課

12 【大学の仲間たち】

チョウトンボ

自然環境教育センター長 前田 喜四雄

ならやま
2007年秋号

CONTENTS

表紙紹介

第58回 輝菫祭

表紙題字
名誉教授

池田 桂鳳

ポスターは理数・生活科学コース3年生・河内淑恵さんの作品です。



第58代大学祭実行委員会委員長
國安雅也

イベントに関しては、毎年恒例の国際三輪車レース、学生参加による仮装行列、テーマにちなんだ「ふらり豪華列車」また、子どもたちにも楽しんでもらえるよう、最終日には子どもフェスティバルを企画しています。

第58回輝菫祭は11月22日(土)24日(土)の3日間で行います。今年のテーマは「ふらり、途中下車」。「大学祭に来ていただいた方に、ゆつくり、じっくり、楽しく祭りを堪能してもらえよう」という想いが込められています。近頃、何かと世間がせわしないように感じられる中で、大学祭という楽しいお祭りをゆつくり楽しんでいたきたい、というのがこのテーマを受けての個人の想いです。

創立120周年に向けて

この10月1日から、奈良教育大学の学長に再任となりました。任期は2年間です。第1期中期目標期間の半分を過ぎ、次期中期目標期間の計画を検討するという重要な時期を迎えることとなりますが、よろしく願っています。

正倉院展の開幕とともに、奈良の深まる秋を迎えています。

本学恒例の大学祭も第59回を数え、間もなく始まるうとしています。本学の大学祭は『輝覚（きぼう）祭』と名付けられています。『輝覚祭』と呼ばれるようになったのは、昭和50年（第26回大学祭）からだそうですが、輝覚という造語は、「天平のかがやく覺千年の古へいまに」で始まる奈良教育大学の学歌の歌詞に拠っています。この学歌は、昭和43年（1968年）に本学の創立80周年を記念して制定さ

れたものです。今から約40年前のことですから、卒業生の多くの方々はこの学歌斉唱とともに巣立っていったこととなります。

このような歴史的なことに触れたのは、来年（2008年）には、本学が奈良県尋常師範学校の創立（明治21年／1888年）から数えて120周年という一つの区切りの年を迎えることになるからです（その起源は明治7年に設立された『寧楽書院』にまで遡ることができます）。

偶然ではありますが、戦後の昭和24年、師範学校から新制大学となった奈良学芸大学（現在の教育大学）の設立から数えて約60年を迎えます。本学は、師範学校での教員養成を60年間、大学における教員養成を60年間という永い道のりを歩んできたわけですが、教員養成大学としての新たな

飛躍と発展を期するため、来年秋を予定して記念事業を計画しています。改めてご案内を差し上げたいと思います。

120周年記念を意識したわけではありませんが、本学では、来年4月開設をめざして、高度専門職業人としての教員の養成に特化した教職大学院の設置を計画しています。さきほどの60年の繰り返しを思うと、大学院における本格的な教員養成・研修のスタートに立ったという予感がします。

現在、国立では15大学、私立では6大学が設置を申請していますが、『ならやま』本号が配布されるころには、設置申請の審査結果がわかることになっています。学校教育を支える教員の資質能力の向上に対する社会からの強い要請と期待にこたえるべく、各大学とも、地域との連携を深めた個性特色ある教育内容を準備していま

す（本学の教職大学院については本誌4・5頁をご覧ください）。

さて、法人化してから早くも3年半が経ちました。この間も、文部科学省からの施設整備のための予算配分を受けて古くなった建物の改修を進めています。どうしても講義棟・研究棟が先行するため、課外活動施設（サークル棟）などの整備が遅れていました。

国立大学法人への運営費交付金配分は相変わらず厳しい状況が続いているのですが、これまで3年間の様々な経費節減分を原資とした目的積立金の一部を取り崩して、懸案であった課外活動施設の整備（建替え）を本年度内に行うこととしました。昨年来、学生の皆さんとも相談をしながらの計画づくりでしたが、ようやく着工の運びとなります。学生の皆さんの課外教育活動の拠点として活用されることを願っています。



柳澤 保徳
奈良教育大学 学長

教職大学院で実践的指導力をつけよう

教育実践開発講座・教授

安藤 輝次

■ どうして教職大学院が必要か

今やモンスターペアレントが話題になるほど、保護者が学校に無理難題要求をすることもあります。一人ひとりの子どものニーズに応え、学力批判にも耐える授業ができ、表現力や思考力を育てることが求められています。このように学校の先生の仕事は、決められたことを決められた手順でやればよいという単純なものではありません。

では、どのようにすればこれらの現代的な教育課題に応える教師の実践的指導力は身につくのでしょうか。教師は、実践を重ねれば、自然と力量が形成されるわけではありません。もしもそうであれば、教職経験を積んだ人は誰でも「優れた教師」になっているはずですが、現実にはそうなっていません。力量のある教師とない教師との違いは何かというと、一つには教育実践を分析し検討する切り口として理論的な枠組みを持っているかどうかということでしょう。

しかし、教育の理論を知っていれば、優れた実践ができるというのも誤りです。同じ子どもでもその時々状況でまったく別の姿を見せるように、個々の教育実践は、個性的で一回限りのものであり、実践で出会う問題を解決する際にも特殊な条件を考慮せざるを得ないからです。既成の理論がまったく当てはまらない教育現実に遭遇することも珍しくありません。自分

や他の教員が行った優れた教育実践を集めて紡ぎ、その根底にある理論を見出して、実践に往還させるという柔軟な頭が必要になります。

このような新しい教育要求に応じて、実践的指導力のある教員を養成しようとするのが、平成20年度から発足する奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程（以下「教職大学院」と略す）です。教職大学院設置に当たっては、これまで奈良県教育委員会と協議を行い、奈良市・大和郡山市・生駒市・天理市の小・中学校とも連携協力のパートナーシップを結び、力量のある教員を養成するための準備を進めて来ました。そして、全国に先駆けて、来春、2年制を基本とする教職大学院を開設する予定です。（設置申請中）

■ 確かな実践的指導力をつける 手立てが満載

図に示すように、院生は、「共通5領域」それぞれ（①教育課程の編成・実施、②教科等の実践的指導方法、③生徒指導・教育相談、④学級経営・学校経営、⑤学校教育と教員のあり方）に設けられた科目から少なくとも2科目18単位を履修しなければなりません。「深化を図る科目」では、特別支援教育や保護者対応など新しい教育要求に応える授業科目が設けられています。これらを見ても、現行の教育学研究科の授業科目とは違うということ

が分かるでしょう。

◆ 理論と実践の往還の鍵となる「実践科目」

本学の教職大学院の一つの特徴は「実践科目」19単位のうち「実習科目」12単位を履修し（現職教員の院生は8単位まで免除することがある）、大学院で学んだことを小・中学校で確かめ、課題を見つけて、解決して、教員としての資質や能力を高めようとしていることです。

もう一つは、「演習科目」として、「ポートフォリオ」「アクションリサーチ」「ケース・スタディ」「授業省察」の4科目（各1単位）を必修として学び、学校での実習内容と関連付けていることです。この演習科目は、他の教職大学院のどこにもない画期的な試みです。

さらに「研究科目」の中にある「実践理論研究」（1単位）も本学独自に設置した科目です。これは、学外の学会や研究会への参加発表を単位化したもので、修了までに最低1単位は必修としています。

◆ 目指す教師像の資質能力の獲得を 確かなものとする

本学の教職大学院では、院生は、次の4つの教師像から一つを選び、授業科目を履修し、目的意識的な学びを実現しようとしています。

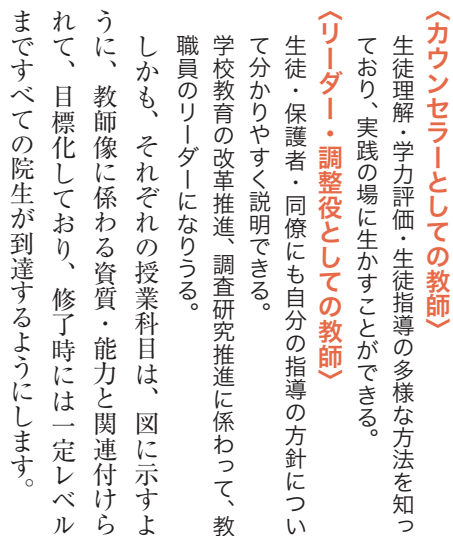
《計画者・授業者としての教師》

課題の解決・達成に向けた多様な方法を駆使できる。学級経営や生徒指導を根拠にした授業改善に取り組む。

自分の授業を分析的に考察し、その改善を図る。

《教科の専門性に強い教師》

専門的な知識・技能等を実践の場に生かす。教科の面白さ、楽しさ、有用性を伝えることができる。



実は、平成19年10月から文部科学省の「専門職

このプログラムは、生徒指導や教科指導の学校問題の解決に向けて、県内の関係機関や研究会と連携して、組織的に対応できるプランナー、コーディネーターとしての力を院生に培う演習科目のプログラム開発を目指しています。本年度は、教職大学院就任予定の教員が現行の大学院教育学研究科の院生6名と一緒に、生徒指導や教科

学力検査日及び募集人員(予定) ..

(A日程)	平成20年1月12日(土)	20名
(B日程)	平成20年3月15日(土)	若干名

出願期間..

A日程	平成19年12月12日(水)
↳	平成19年12月18日(火)
B日程	平成20年2月28日(木)
↳	平成20年3月3日(月)

※詳しくは奈良教育大学入試課にお尋ね下さい。

Tel. 0742-27-9126

教育の県内機関や研究会を訪問して、具体的な事例を収集しています。皆さん、来年度は教職大学院生（定員20名）となつて、このプログラムを私たちと協働で推進していきたいませんか。

最後に、奈良教育大学教職大学院の募集人員、学力検査日、出願期間をお知らせします。

「地域と伝統文化」教育プログラム

プログラム実施担当者・准教授

山岸 公基

■大学院教育改革支援プログラムと本学の取り組み

大学院教育改革支援プログラムは、大学院教育の実質化を目的として本年度より新しく採択交付されることとなった補助金制度です。本学からは、全学的支援のもと、大学院教育実践開発専攻伝統文化・文化財教育系、異文化理解教育系が進めてきた、地域の伝統文化とその源流に関する最新の教育内容学の成果に基づく教材開発、教授法・学習法開発の実績と今後の計画が評価され、平成21年度までの3カ年度にわたる取り組みに補助金が交付されることとなりました。

■文化財・異文化の教育力を掘り起す

「伝統文化」の内容は広く多岐にわたりますが、本学の「地域と伝統文化」教育プログラムは、研究・教育内容として奈良の考古・美術工芸に力点を置く伝統文化・文化財と、諸外国(本学の場合は主に留学生)との対話相互理解を重視する異文化理解の二つの系によって担われるところに特色を持っています。二つの系は、たとえば奈良の仏像に接し感動して伝統文化に目を向ける、あるいは奈良に学ぶ留学生が体現する異文化と日本の伝統文化との意外な共通性に驚く、といった事例に示されるように、奈良に代表される地域の文化的な底力(五感を触発する力、教育力とも言え換えられるかも知れませんが)を掘り起こしつつ、各人にとっての伝統文化の意味・価値を主體的に、あるいは相対化しつつ形成してゆくプロセスが共通しています。しかもそれが、奈良で学び、現代及び将来の国際化社会を支えてゆく大学院生に、専門分野の教育・研究に加えてぜひ身につけてほしい力量の主な一つであることも首肯していただけたと思います。

■全学に開かれ、発信にも重きをおく教育プログラム

教育学研究科内の一専攻向けといった枠に留まらず、全学に開かれた教育プログラムとして「地域と伝統文化」教育プログラムは構想されています。今年度後期から新たに展開しているプログラムの共通コア科目「世界の中の奈良」も、伝統文化・異文化の教育力を活用した実践体験・実地研修と座学とを往還する授業科目で、教育実践開発専攻生だけでなく、教科教育専攻生や留学生も興味を持ち受講しています。来年度前期からは「伝統文化発信法」1、2、3が新規授業として加わり、「学び、理解する」ことに加え伝統文化を「発信する」ことにも特色を打ち出してゆく予定です。またこのプログラムにより、従来から本学大学院で展開されていた地域と伝統文化に関する授業

■「保育実践知」教育プログラム

これからの幼児教育の担い手には、幼保を統合する「保育実践知」が必要です。今回採択されたプロジェクトは、その教育プログラムを開発します。奈良教育大学が奈良佐保短期大学と協働し、2年間の計画で実施します。

保育とは、子どもの姿(発達)と保育内容、それに子どもとの相互関係を踏まえ、刻々に判断し行動していく営みです。こうした保育の力量を私たちは「保育実践

幼保統合の「保育実践知」教育プログラム

プログラム実施担当者・准教授

横山真貴子

知」と呼んでいます。

今、保育現場では、幼保二体化施設である「認定こども園」制度がスタートするなど、従来の幼稚園・保育所といった枠を超えて、2つの実践を統合的に展開する新たな力量が求められています。本プロジェクトは、こうした社会的なニーズに応えていくとするものです。

■地域で保育者を養成します

「保育実践知」は大学で学ぶだけではなく、実際に保育を見たり、自分の身体を動かして実践に参加する、



科目が深化科目として束ねられ、専門領域の内容の深さと教科横断的なウィジョンとを併せ持つ人を社会に送り出せると考えています。アジアに目を向けた連続講座の開講や、アジアの教育大学とのネットワークの構築も視野に入れています。「地域と伝統文化」教育プログラムへのご理解と温かいご支援を賜りますよう、取り組み担当者の一人としてお願い申し上げます。

大学の取り組み

奈良教育大学は「ユネスコ協同学校」に加盟しました。日本ではこれまでに20校あまりの小学校、中学校及び高等学校が加盟していますが、大学としての加盟は日本で最初です。

ユネスコは国連専門機関として、教育・科学・文化の協力と交流を通じた国際平和と人類の福祉の促進を目的として設立され、その目的に基づき活動を行っています。

「ユネスコ協同学校 UNESCO Associated Schools Project Network: ASPnet」は、ユネスコが推進している理念を学校現場で実践することを目的としています。その活動の内容は次の2点です。

● ASPnetを利用して、世界中の学校と生徒間・教師間で交流し、情報や体験を分かち合う。

ユネスコ協同学校に加盟

副学長（国際交流・地域連携担当）

淡野 明彦

● 地球規模の諸問題に若者が対処できるよう新しい教育内容やその手法の開発・発展を目指す。

研究テーマとしては、以下の4分野を基本としています。

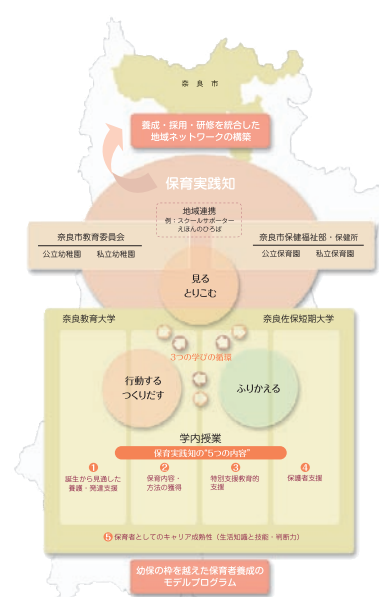
- 1・地球規模の問題に対する国際システムの理解
- 2・人権、民主主義の理解と促進
- 3・異文化理解
- 4・環境教育

本学は教員養成を主目的とする大学として、教育・研究の基礎的水準の維持と向上に努めてきましたが、さらには教育・研究を通じた国際貢献を強く意図してきました。また、国立大学の法人化以降は、特色ある大学としての存在が強く意識されるようになりました。本学は、これまで30年以上にもわたって人権教育の歴史と成果があり、日本及び世界の民主主義の普及



三笠保育園での「出張えほんのひろば」

その体験を振り返るといった経験を積み重ねることによって、よりいっそう身になります（3つの学びの循環）。



本プログラムでは、奈良市教育委員会並びに保健福祉部と連携し、学生が大学と幼稚園・保育所連携園を往き来しながら、現職保育者、大学教員とともに学びを深めます。

学びの内容は、今、特に保育者に必要だと考える次の5つを取り上げます。

- ①「誕生から見通した養護・発達支援」、②「保育内容・方法の獲得」、③手厚い援助を必要とする子どもへの「特別支援教育的支援」、④保育現場から要請が高い「保護者支援」、

次年度に向けて

採択が決まった10月以降、奈良教育大学がこれまでに積み上げてきた学内授業と地域連携活動を見直し、「3つの学びの循環」と「5つの内容」を組み込んだ授業や活動に着手しています。このプロジェクトを通して、大学、行政、保育現場が手を結ぶ、養成・採用・研修を統合した地域ネットワークを構築していきます。

と徹底に寄与してきました。また、奈良という自然と伝統文化に恵まれた地域にある大学として、環境教育、文化教育も推進してきました。

こうした基礎をもとに、さらに国際的な教育・研究へとレベルアップするために、ユネスコ協同学校に加盟し、世界の各地域及び学校との連携を進め、地球規模での大学としての貢献を図ることにしました。

本学では、大学の教育・研究のキーワードとして「世界遺産」をあげており、日本でも最多の世界遺産を有する奈良県にある大学として、ユネスコが世界的規模で進めている世界遺産の保全・保護に関する環境教育及び文化教育への取り組みを、加盟以前よりいち早く進めてきました。

世界遺産の保全・保護は単に世界遺産に対して向けられるだけのものではなく、先にあげたユネスコ協同学校の4分野の基本テーマに通じることです。



ユネスコ協同学校加盟証

宇宙の形と 3次元の幾何学

数学教育講座・准教授

市原 一裕

■宇宙はどんな形？

みなさんは夜空に広がる星空を眺めて、「ふと」「この宇宙はどんな形をしているのだろうか」と思ったことはありませんか？ 宇宙は果てしなく広がっているのでしょうか、それとも…。例えば、この地球が「まるい」ということは、現在だれでも知っています。では、宇宙も「まるい」のでしょうか。でも、宇宙が「まるい」って？

実際に宇宙を観測し研究するのは「宇宙物理学」です。しかし、その観測結果をどのように判断するのか、そのための「モデル」をつくるのは「数学」なのです。これが、いわゆる幾何学の一分野であり、僕の研究分野である「3次元多様体論」です。

■現代数学と幾何教育

この4月に奈良教育大学に着任しました。改めて見直すと、いわゆる「現代数学」と、教育現場での科目としての「数学」の乖離に愕然とします。「理数科ばなれ」といわれている今、どうすれば

数学の楽しさを伝えられるのか、それをさらに伝えられる教員を育てることができているのか、日々、格闘しています。

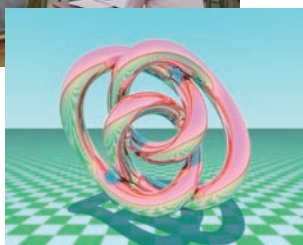
■学生とともに

現在、4回生4名と一緒にゼミをしています。4人には、それぞれテキストを1冊選んでもらいました。1年かけて勉強して卒業論文にまとめてもらう予定です。

それぞれが、かなり異なる感じのテキスト（抽象的な高次元幾何学、目に見える結び目理論（図参照）、コンピュータによる図形描画、数理パズルの新問題集）を選んでくれたので、毎週、新しい発見があります。これまでゼミをもったことがなかったのも、学生とともに試行錯誤しながら、けれど本当に楽しく勉強させてもらっています。



ゼミ風景



「目に見える結び目理論」
(これも数学です)。

「ことば」の 変遷を見つめて

英語教育講座・准教授

米倉 陽子

■言語の変化と人間の認知

私の専門分野は認知言語学で、特に「ことばの変遷」と「ことば」の関わりに注目しています。一つの語にたくさん意味があることを多義性といいます。多義の分析は認知言語学が最も得意とする分野の一つです。

例えば、英語には「縁起の悪い、不吉な」を意味する *sinister* という形容詞がありますが、これはもともと「左手の」という意味でした。この世に存在する道具はたいてい、右利きの人間を想定して作られています。左利きにとっては、そのような道具はさぞかし扱いにくいことでしょう。時には、道具が合っていないために、思わぬ怪我をすることもあるかもしれません。このように考えると、なぜ *sinister* に「不吉な」という意味と「左側の」という意味が同居しているかがよく分かります。

sinister の対語としては *dexter* 「右側の」という語がありますが、この語から派生した *dexterous* には「手先が器用な」という意味があります。左利きの人より右利きの人の方が右利き



授業風景

用に作られた道具類の扱いはたやすいでしょうから、仕事の出来ばえが上々になることも多いでしょう。「右」という概念に「器用さ、精巧さ」という意味が読み込まれていったことは、容易に理解できます。

■ことばを学問する

私たちは普段、母語であれば特に意識することもなく、ことばを操って生きています。学問は、あたりまえのことを疑問に思うことから始まるということです。あたりまえの存在である「ことば」の変遷を見つめることで、人間がどのようなメカニズムで自分を取り巻く世界を理解し、それがどのように言語に反映されてきたのかをこれからも考えて生きたいと願っています。



和菓子作りの手ほどきを
受ける子どもたち



障子の開け閉めを
練習する子どもたち

地域に学ぶ 伝統文化

京都市立洛央小学校・教諭

畑 和代

(平成12年3月教育学部卒業)

「地域ぐるみの学校づくり」の実際

現在私が勤務する学校は、明治2年に全国に先駆け、番組小学校として開校した5つの小学校(豊園・開智・有隣・修徳・格致)が統合され、平成4年4月に開校した学校です。

校区には、古くからの伝統産業の店も多く、仏具・扇子・呉服・京人形・染め・組紐・提燈など、京都ならではの店がたくさんあります。また、日本の三大祭の一つといわれる祇園祭の山

鉾三十二基のうち半数を有し、七月は祇園祭一色になります。

学校の特色の一つとなっている伝統文化クラブは、『洛央いきいきコミュニティ』(学校運営協議会)の発足を受け、『わくわく伝統文化』として、地域ボランティアの協力と指導のもとに活動しています。今年度の活動内容は、児童の希望をもとに、着付け・茶道・華道・組紐・手描き友禅・和菓子作りを予定しています。

「伝統文化クラブ」の活動

和菓子作りの体験では、「見た目もきれいだけど、何を想像して作っているのかを考えると、よりおいしくなった」「和菓子には、一つひとつ意味があることに驚いた。和菓子は奥が深いなあ」「和菓子から季節が感じられるなんてすごい」という声に代表されるように、お菓子という身近な食べ物から、日本の伝統文化の奥深さを知る機会となりました。

また、手書き友禅を体験したときには、「先生は同じ色でも薄い色濃い色を使い分けていてすごい」「絹にきれいな色広がるのがとても刺激的でした。色の数には限りがあるが、混ぜると、どんな色ができるので、魔法みたいでした」と、自分たちの地域に生きづく伝統文化の良さを肌で感じることができました。

私も子どもと共に、発見や感動の多い時間を過ごしています。これからも、保護者や地域の方々の協力をいただきながら、子どもたちの瞳が輝く活動を計画していきたいと思っています。

ひ と ・ あ れ ・ こ れ

地域を対象とした スポーツ活動

プリントショップA1win(アールウィン)

丹羽 敦巳

(平成16年3月大学院修了)

毎日フル活動

私は現在、父親が経営する会社の社員として、Tシャツなどへのオリジナルプリントやスポーツ用品の販売などをしています。その傍ら、スポーツ教室の運営や講演会活動、地域のスポーツクラブでのスポーツ指導、さらに今年度からはスポーツの家庭教師も新たに開始しました。スポーツの家庭教師は最近色々なメディアで取り上げられることも多く、今後広がりを見せていく業種であると期待しています。



榛原西幼稚園での子ども身体運動発達指導士としての講演会

体育の教師になるのが目標だった

私が奈良教育大学の大学院に入学した当初は、体育教師になることを目指していました。私自身は中学生の頃から本格的にスポーツに取り組みようになり、高校生のときには将来スポーツの指導者になりたいと考えていました。スポーツの指導者になるには体育の教師になって、クラブ活動の顧問になるのが近道だと考えていました。しかし、大学院在学中に地域のスポーツクラブでスポーツの指導を始めたことがきっかけで、学校だけではなくもっと広い視野を持ってスポーツの指導と普及に貢献していきたいという思いが強くなっていました。

教師とは違う立場で

地域でスポーツ指導を行うには、まず資格の取得が先決だと考えました。取得できそうなスポーツの資格を調べ、すぐに取得の手続きを始めました。現在は日本体育協会認定の「スポーツリーダー」と日本スポーツクラブ協会認定の「子ども身体運動発達指導士」の資格を保有しています。奈良教育大学と一緒に学んだ同窓生の多くは教師となり、それぞれの学校で職務を果たしていると思います。私は彼らとは少し違う立場で、スポーツを通じ、社会の発展に貢献していきたいと考えています。

平成19年10月31日午後、本学学生会館山田ホールにて学生、教職員を始め、同窓会、後援会及び地域の方々158名の参加のもと「大学懇談会」が開催されました。

今回は各学生団体選出の実行委員が中心に企画・運営し、開かれた大学、地元に着した大学を目指して大学にかかわる様々な人が交流する場として、平成14年度から開催されていた「全学懇談会」をリニューアルしました。懇談会のテーマは、実行委員会でも何回も話し合っただけのとおり決定され、教育、文化等6つのブースを設け、1テーマごとに席替えするスタイルとし、和やかな雰囲気づくりにケーキとソフトドリンクを用意しました。

- ① 教育 「ゆとり教育(学力低下)」
「教師と保護者」
- ② 文化 「大人×子供」ここが好き、ここが嫌い」
「文化遺産と教育」
- ③ 奈教 「奈良教の授業・カリキュラム」
「学校生活全般——大学祭、掲示板——」
「お国自慢をしよう」
- ④ 国際 「他国の常識と異文化理解」
- ⑤ 社会(身近) 「今の裁判制度って」
「最近の就職事情」
- ⑥ 社会(グローバル) 「憲法9条の是非」
「国単位での環境問題への取り組み」

②文化 「大人×子供」ここが好き、ここが嫌い」のブースでは、自治会長さんを始め、地域の方が9名参加いただき、広辞苑が改定されたことを話題に上げ、実際に追加された言葉を序列していった。昔からあるのに新たに記載された言葉(例…絵手紙、デパ地下)や、方言(例…めっちゃ)の記載までもが見られた。それらの言葉はいつでもどこから発祥するのか、どうして生まれてきたのかなどが話し合われた。うざいは、うつつというしい」という意味であるが、どうして「うざい」という言葉がわざわざ使われるようになってきたのか? 同じ意味であるなら

第1回大学懇談会に 地域の方が参加

大学懇談会実行委員会委員長(学生代表)

旧田 克也

「うつつというしい」という言葉だけで十分ではないか。というような感じで話しが進み、地域の方からは「昔もつかっていたなあ」など世代を越えた意見交換が行われた。

どのテーブルも制限時間をオーバーするほど盛り上がり「教職員の方や地域の方と話す機会ができてよかった」、「子育て世代として、奈良育大学の学生が前向きに教育のことを考え、良くしようとする姿を見て大変喜ばしかった」、「学生に足りないこと、学生が大学に求めていることなどお互いに話し合うことができてよかった」、「学生さんと懇談する中で、お互いを知り共にこの地区をよりよいものにしていくきっかけがもてた」、「このような機会をもっと増やして欲しい」などの感想が寄せられた。

学生同士、学生と教職員、また卒業生や保護者、地域の方々とが自由に語り合い、交流が深めるとともに学生等の声を聞くことにより大学の活性化につなげる目的を達成するために、今後はアンケートの集計結果、実行委員のレポート等を大学ホームページで順次報告していく予定です。



実行委員会委員長の挨拶



地域の方と学生の活発な意見交換 (②文化)



学長告辞



記念撮影



ペルーの民族舞踊
「シクリ・ロスウロス」の披露



10月15日(月)午後4時15分から本学大会議室において、平成19年度日本語・日本文化研修留学生及び大学間交流協定に基づく交換留学生(17名)の入学式を挙行了しました。柳澤学長、重松副学長、川那部留学生委員会委員長、指導教員等関係者が列席のもと、学長から入学許可の後、在学生を代表して春木香那さんの歓迎の言葉がありました。

内訳はルーマニアから3人、アメリカ、ドイツ、フランス、韓国、インドネシアの各国から2人、インド、ベトナム、ポーランド、ロシアから各1人となっています。

このあと、午後6時から猿沢池ほとりの「猿沢荘」において、平成19年度秋季留学生懇談会を今春の麻疹の影響で中止になった春季を兼ねるかたちで開催しました。

中国・韓国等アジア諸国を中心に欧米諸国を含め15ヶ国からの留学生を初め、留学生支援団体からの来賓の方々(奈良市観光経済部、国際ソロプチミスト奈良、国際ソロ

日本語・日本文化研修留学生 及び特別聴講学生入学式

平成19年度秋季留学生懇談会

学生支援課

プチミスト奈良一まほろば、奈良市国際交流ボランティア協会、NPO法人奈良NPOセンター、ホストファミリー、帝塚山大学)、チューター、指導教員等、約130名の出席がありました。

懇談会は柳澤学長の挨拶、重松副学長の発声で乾杯があり、来賓の紹介・挨拶のあと、テーブルを囲んでの歓談となりました。留学生同士も「今日はじめて会った」という出会いがたくさんあったようで、記念撮影をしている姿も見受けられました。

途中、4月以降に入学をした留学生等による自己紹介、秋入学の留学生等による「上を向いて歩こう」の合唱がありました。その後、ペルー及び中国からの教員研修留学生によるペルーの民族舞踊「シクリ・ロスウロス」の披露の後、同舞踊を参加者全員で一緒に踊り、参加者の交流の輪が広がり、和やかな雰囲気で終始した有意義な時間を過ごすことが出来ました。

大学の 仲間たち



(写真提供：奈良教育大学 藤原公昭氏)

和名 チョウトンボ
学名 *Rhyothemis fuliginosa*
分類 トンボ科
翅開長 70～75mm くらい

チョウトンボ

ゆったりとひらひらと飛ぶので、その飛んでいる姿はまるでチョウが舞っているように見える。しかし、止まっている姿を見ると、後翅が通常のトンボよりはかなり幅広いが、明らかにトンボである。したがって、チョウトンボという名前をもらっている。

大きさはよく見かけるシオカラトンボよりやや小型であり、翅を開いた時の両端の長さ(幅は71.75センチメートルくらいである。幼虫(いわゆるヤゴ)はどちらかというと流れがあまりなく、水草がよく繁茂する池や沼を好むようである。本学構内にはこのような環境はないので、ヤゴは見られない。しかし、周辺にはこのような環境の池沼が少なく、水面やその付近でよく見かける。本学にはそのような池沼から飛来すると思われるが、あまり頻繁には見られない。時々、小学校のプールが使用されていない夏休みに、その周辺で目にすることがある。

写真は事務棟横の池の周囲を囲っているウバメガシに止まっているものである。この池にはハスなどの水生植物の鉢が置いてあるが、チョウトンボにとっては少ないということであろうか、この池に産卵する姿を見かけたことはない。

(自然環境教育センター長 前田喜四雄)

URL

<http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/index.htm>



奈良教育大学 広報誌

第26号 平成19年11月22日 編集／広報・情報公開委員会 発行／国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528 奈良市高畑町 TEL. 0742-27-9105 FAX. 0742-27-9141
<http://www.nara-edu.ac.jp> kouhou@nara-edu.ac.jp